・小次郎沼の伝説……応永二一年（一四一四）鎌倉北條時行の遺臣、高階大次郎通治が一族郎党七〇余人と共に出羽の飛島より来たりて本村入道森の馬場に住む。同二四年（一四一七）の春、椿台に移住するまで前後四年、この地にあり。

そのころのことなり。大次郎の弟、小次郎通吉、釣を好み「沼の又」の沼に日々行きて釣糸を垂る。しかも獲るところの岩魚の数毎日相同じ。小次郎の妻あやしみて或る日、ひそかに夫のあとに従い行き、沼のほとりなる木陰に身を寄せ見ありしに、夫小次郎は妙齢の美女とともに筏に乗りて釣りするさま、いかにも睦ましげなり。妻これを見るなり嫉妬の情むらむらと起こり、思はず大声をあげて怒号す。小次郎それと気づき美女と相抱いて湖中に投じ、再び浮かばず。里人「これ沼の主ならん」といえり。仍而この沼を尓来「小次郎沼」と名付けたり。その後、天正のころ（一五七三～一五九一）増田城主土肥次郎、家来をしてこの沼の水を沢へ切り落し、岩魚を捕えんとせしに、水と共に流れくだる魚、悉く小蛇と化せりとなん。

（因みに小次郎沼は、現在水はなく、曽っての湖底や周囲は樹木や雑草が茂り、昔の面影もない。数年前、沼の縁に当る場所が県道水沢・十文字線（現国道）の路線として掘さくされた時、路傍の断面に泥炭層が露出しており 昔湖底だったことがうなずかれる）